

感覚人類学の新たな展開

——多元感覚人類学への道筋拡大 と情報社会の進展へ応用 可能性——

宮坂 敬造

Abstract During 2011 to 2013, focusing on sensory turn in anthropology and sensorial anthropology, the author organized a symposium, published articles, and guest-edited a special issue; by critically reviewing "sensorial anthropology (the then new term advocated by David Howes) , the author prepared original discussions on the methodology of the new discipline with regards to phenomenological modifications while casting a critical light on the debate in sensorial and sensory anthropology, as well as cross-referencing to the author's own ethnographic case examples [which, written in English, were sporadically cited in international scholarship].

On the occasion of the author's short-term visiting fellowship at the Division of Social, and Transcultural Psychiatry, McGill University, Montreal, this autumn of 2019, the author got exposed to an impressive wave for new expansions of sensory anthropology, through the renewal of contact with professor David Howes at Concordia and his colleagues at the Centre for Sensory Studies and Milieux.

Based on the above new exposure, this essay as a working paper [research note] aims at concisely reviewing the second stage of sensory anthropology after 2010, the ongoing new orientation for multisensory anthropology, and further the scope for the understanding for socio-cultural and experiential features of further advanced information society; the author, Keizo Miyasaka, prof. of anthropology, Tokyo, Tsushin University, finally focuses on its possible application towards sensory evaluation, in affiliation with anthropology of advanced science and technology, on newly appearing socio-cultural and advanced-technological environment with emergent intelligent machines and other epoch-making devices.

Key Words: anthropology of the senses, sensory anthropology, multisensory, sensory turn, sensory experience via digital technology and art

1. はじめに——コミュニケーション事態において使う感覚が、文化によって異なる

アラブ系の人アメリカ人と挨拶をしようと、アメリカ人に近づいてくる——すると、アメリカ人が後ずさりするような光景がよく見られる。これは、プロクセミクス（近接学）を開拓した人類学者の E.T. ホール（Edward T. Hall, 1914～2009）が著書で取り上げた「異文化接触事態のコミュニケーション行動」例のひとつである。北アメリカでサウジアラビアの中年の大学院生にあったときの筆者の経験だが、やはりずっと距離を詰めてきて、筆者の顔先までその人の顔を近づけてきた。そして、右手の肘を曲げて、手のひらを胸の手前に

持ってくるようなかたちで、筆者の手を握りしめるやりかたで握手をした。アラブ系の人は挨拶をする時、相手の匂いをかげる距離まで近づかないと挨拶した気持ちになれない——ということは、上記の人類学者 E.T. ホールの著書を読んで知っていたのだが、実際にやられてみると、感覚的にはなんとなくこそばゆい、というか、いささか圧迫感を感じたことを覚えている。欧州系アメリカ人の場合は、アラブ系の人が距離をつめてくると、落ち着かなくなつて、後ずさりしてしまうのである。

アメリカ人の場合、手をほぼまっすぐ伸ばして握手をする距離が、お互いの挨拶ができる適切な距離となる。日本人同士の場合には、アメリカ人など西欧系の人々同士の場合よりはややながく距離を取る——お辞儀をして頭がぶつからない距離が挨拶に適切な距離となっているからである。かつて、日本の首相がアメリカの大統領と握手をしたとき、お辞儀をするようなかたちで頭を下げながら手を差し伸べた。アメリカの大統領はまっすぐ背筋を伸ばして握手をしたのである。この非言語的行動の交換は、ヨーロッパやアングロ・アメリカの文化圏では、日本の首相が目下の人間としての行動をアメリカの大統領に取ったと受け取られやすい。両者がともに背筋を伸ばして、同じような形で握手するのが対等な立場を非言語的に表明する行動様式となっているからである。こうした話題をふくめ、人類学的近接学研究について——もう、25年前くらいになるが——E.T. ホールそのひとと、彼の投宿先である東京池袋のホテルを訪ね、先輩の人類学者とともに筆者も談笑しでことがある。その時の話題は、こうした近接学による研究が、国際的なビジネスを円滑にすすめるために、実用的な価値がある、ということであったのだが、もうひとつ強調されたのが、文化によって感覚の使い方が非常に異なる、ということであった——コミュニケーションをする過程で匂いの嗅覚を使うために、アラブ系の人は他の人の密接空間に頻繁に入るのだが、アングロ・アメリカ人は通常の接触事態では匂いの感覚を使わないため、アラブ系の人が近づく行動を脅威と感じる。アラブ系の人々は、現在でもしばしば仲人と親の相談による斡旋結婚をする場合が多いが、そうした場合、仲人は花嫁候補のそばの密接空間に移動し、匂いを嗅がせてくれと当然の権利のように言う、ということである。花嫁候補の匂いを嗅ぐようにと、花婿側から頼まれたためであるが、そうすることによって、男性の仲人は、アラブ文化圏の価値観に基づき、花嫁候補が本当に夫候補のよき妻になりうるかどうか、彼女の性格にあたりをつけけることができる。彼らの文化圏では、そのように信じられているわけであるし、また、実際に匂いによる人柄や健康状態の判別法が当たり前のような文化的ノウハウになっているのである¹。このようなことは、アングロ・アメリカでも、また、日本の文化社会でも、ほとんど聞いたことがない発想であろう。

筆者はこのような人類学的近接学の説明も使いながら本学の担当科目のひとつであるコミュニケーション論 B 後半部の〈言葉によらないコミュニケーション〉の講義を編んでいるのだが、このような研究課題は、「感覚の使い方が文化や時代によって異なっている」という人類学の独特の研究課題となっている。近接学を経由してこの課題が研究され、今日では、「感覚の人類学」ないし「感覚人類学」という分野でもつばら研究されるようになってきているのである。

2. 2012年時の筆者の感覚人類学考察のいきさつと、近年の新しい流れとの出会い

1980年代後半から「感覚の人類学」anthropology of the senses という言葉が使われ

るようになった。2010年頃には、*sensorial anthropology* という用語がデヴィッド・ハウズ (David Howes) によって提唱されたが、サラ・ピンク (Sarah Pink) は *sensory anthropology* という用語を使って研究を進めた。現在は、前者も後者の用語を使うようになっている²。筆者は、D・ハウズを2011年7月、前任校慶應義塾大学社会学研究科に招聘し、小規模国際シンポジウムを開催した。また、2012年3月、感覚人類学のレビューと検討を行う英語論文を執筆し、その時点までの感覚人類学の流れを概観しつつ、当時の慶應義塾大学人文グローバルCOE研究プロジェクト課題に即し、文化人類学的な論理と感性研究に惹きつけて感覚人類学と医療人類学の関連を論じた。さらに、2013年2月に立命館大学の英語紀要誌に感覚人類学 *sensorial anthropology* の特集号をゲスト・エディターとして編集している³。

2012年3月の論文で示した筆者の見解であるが、デヴィッド・ハウズと社会人類学者ティム・インゴルド (Tim Ingold) およびサラ・ピンクとの間で行われた〈感覚人類学の人類学的認識方法をめぐる論争〉を取りあげることが今後の感覚人類学の方向を論ずる上で重要である点を指摘し、議論のひとつの核とした。幸い筆者は、サラ・ピンクと2009年9月の特定の国際学会で議論を交わす機会があり、また、2009年12月、筆者が企画実行した小規模国際学会において、彼女から寄せられた論文原稿を検討する機会があった(彼女は来日予定だったが病気のため論文寄稿のみとなったのであったが、この後、2013年11月、メルボルンで開催された映像人類学関連の国際シンポジウムおよびワークショップでもパネラーとして彼女と議論する機会ももつなどして、映像人類学との関連において感覚人類学研究を進めてきた彼女の立論・枠組みの基本発想を理解してきた)。ティム・インゴルドについても、2012年3月1日、彼の来日時の講演の機会に、少しく感覚人類学について意見をかわす機会も得ている⁴。

その後は感覚人類学の研究をひとまず置いて、科研費などの別の研究テーマに携わっていたのであるが、この分野での研究方向が拡大していく様子であることが気になっていった。そして、この2019年9月～10月にカナダのモントリオールにあるマギル大学社会文化精神医学部門短期客員研究員として科研費研究に従事していたおり、この都市に立地するコンコーディア大学社会学人類学部および the Centre for Sensory Studies と Milieux [Institute for Arts, Culture and Technology] を二日にわたって訪問し、デヴィッド・ハウズ教授に久しぶりに再会する機会をもつに至り、同上研究所や学術誌 *The Senses and Society* の最新号、同教授執筆で発刊直前だった *Multisensory Anthropology* (多元感覚人類学) と題する論文などの新資料をいただくことができた⁵。彼のグループに代表される新しい動向のひとつの流れには、メディア・アートや仮想現実に関わる感覚経験についての研究が含まれる。また、上記のサラ・ピンク教授は豪州クレイトンのモナッシュ大学 (Monash University) で *design anthropology* の教授に転じているが(メルボルンの RMIT University [Royal Melbourne Institute of Technology] でも特任で兼任し、また、もとの英国の Loughborough University とスウェーデンの Halmstad University 応用社会文化分析の教授も非常勤のかたちで兼任しているようである)、感覚人類学、感覚民族誌の基軸に沿いつつ、デジタル・メディア、さまざまな創発技術、知能技術革新、自動運転車、エネルギー最適管理・維持可能性などの研究プロジェクトを組織し、情報工学部とデザイン学部の併任教授となっている。まさに、本学の情報マネジメント学部で取り上げるべき価値が高いと思われる研究課題群、

すなわち、情報学の展開が社会と出会って新しく創発される社会文化的技術の展開様態についての一連の研究プロジェクトに関わっているのである⁶。

以下では、まず簡単に感覚人類学の輪郭をひとまず描いてみるが、その後に、上記で述べた感覚人類学の近年の新地平について、とくに上述の二人の主導的研究者とその研究集団の代表的研究動向に絞るかたちで検討してみたい。

3. 感覚人類学素描

前節で述べたように、筆者はすでに1980年代後半以降から現れ始めた感覚の人類学の展開について、2012年初頭までのタイムスパンで概観し、検討を加えていたわけである。本稿ではそれを繰り返すことはしないものの、素描の範囲で感覚人類学の輪郭について少しくなくぞっておきたい。

いわゆる未開とみえる小規模社会では、多元的感覚がからみあった経験に満ちた豊かな生活実践が見られる。始原的社会の深層思考に二項対立による論理構造性をみてとったのが構造人類学のレヴィ＝ストロースであったが、彼は、感覚経験に満ちた始原的生活状況のなかで感覚によって捉えた経験が対比されて野生の思考の論理性が獲得された点を掘り下げたのであった。オノマトペよりも感覚経験の生々しい痕跡を示す前言語的なアイコン的多重感覚喚起準言語があるが、この多元感覚的準言語の事例も、小規模社会の事例から報告されている。そうした問題とも絡み、感覚経験を豊かに喚起する小規模社会の象徴的儀礼の様相が多々観察・報告されている。たとえば、共感覚的な経験が特色となった多元感覚複合的な儀礼が、ペルーのインディオのシピボ＝コンボ族(Shipibo-Conibo)の病気治しの事例で報告されている。薬用の香草や儀礼用の葉タバコなどの香り、病気治しの呪文の歌唱の響き、病いを判じ治療を方向づけるための感覚的象徴となる幾何学的なデザイン模様、病気治しの儀礼中に患者に与えられる、彩り豊かな食べ物——これらがすべて、視覚の刺激、匂いと味覚の感覚、さらには触覚や複合的感覚を患者に感じさせる。患者はそうした感覚経験に満ちた環境のなか、孤立感なくケア対象の主人公の気分をずっと味わうことになる。治療者としてのシャーマンは、治療のはじめの段階で、ツタから抽出した幻覚性成分を含むアヤワスカを飲み、それによって患者のオーラを幻視し、健康な本来の身体像からゆがんだ病の幻像を知覚し——自分の医薬壺にある呪文や美しい幾何学的なデザイン模様をゆがめようとしている病いの元凶の悪霊による攻撃を防禦しながら——悪霊が放つ瘴気が障る悪臭を消す治療を進め、患者の体の中に呪文の歌を吹き込む⁷。

悪臭を除くなど、感覚経験の模様替え儀礼ともいえる上記の病気治しの事例とも関係するが、日本の近世までの医学や西欧の近代以前の医学でも、顔色、舌の色合い、肌の温感、脈動感、あるいは、触診、問診、聴診などの言葉で表されたように、治療者がみずからの体の諸感覚を使って病いの診断を行っていたことが想起される。また、病気自体が多元的感覚の絡み合う体験なのである。患者にはめまい感や痛み・苦痛の感覚が伴うが、とくに激しい苦痛は言葉にできない前言語的な身体経験そのものである。こうした病苦の感覚は、皮膚感覚、筋肉等の肉体的感覚、内臓感覚、さらには、釣り合いや身体動作等の内受容性の感覚が合わさった、多元多重感覚複合的なものである。

このような複合的な多元的な感覚経験そのものをどのように捉えるか、という点が文化精神医学・医療人類学問の領域でも近年提起されているが、これはまさに今後、多元感覚人類

学による理解・解明が期待される研究課題なのである⁸。

同じ言語文化圏でも地域の差や階層・所属集団によって感覚経験の幅・質に差異が見られる。日本の香道がよい例になるが、際立って異なる儀礼的な空間を設け、香木を焚き、匂いの感覚に集中する機会となる文化的慣習を示す文化がある。香道に親しんでいる人の数がさほど多くない——日本文化に属する人々の間でも、感覚を社会文化的に使用する機会や慣習の分布に大きな差があるということもあるわけだ。香道の場合は、その場での衣装や礼儀作法、立ち振る舞いも重要となるし、儀礼的美的用具や空間も欠かすことができない。さまざまな香りを嗅ぎ取る技——香道では香りを聞く、聞き分ける、つまり、聴覚になぞらえて香りをうけとる経験を捉えるので、そこには共感覚の様相が宿っているとみることができようが（香道のひとつのやりかたでは、匂いの特徴を味覚の言葉でも捉えようとする）——香りの感受性訓練と平行して、和歌を香りの感覚経験に翻案するかたちで理解する課題をこなし、もっと高度になると、感覚で感じた境地を和歌の詩的な形で表現しなければならない。匂いの感覚のみならず、匂いを位置づける文学的境地を樹立していかななくてはならない。文化伝統の教養も動員して感覚的経験を、いわば昇華させることになるわけである。共感覚的多元的感覚経験が社会的出会いのなかで共有され、匂いの基調から縁起された境地、すなわち世界観・宇宙観にまで拡大重合していく場合があるのである。イメージ言語感覚を豊かにもち、文字文化の教養と匂いをはじめとする複合的感覚を総動員する文化的慣習といえよう。香道の事例を深く掘り下げて考察する場合、匂いの嗅覚を独立した分離可能な感覚とし分析的に取り出して、この感覚経験のみを論ずるだけでは、不十分となる。感覚区分論では香道にまつわる全体的感覚経験を深く受け止めることができないからである。

とはいうものの、感覚の人類学の領域において、1990年代までの議論では、感覚を分離可能な五官にわけ、例えばアラブ系の文化は匂いの感覚を西欧文化よりは強く働かせる、といった分析が中心だった。また、それらの異なった感覚が組み合わせる比率が文化によって異なるという、いわばマクルーハン流の感覚比率の分析戦略も、次の段階の議論で試みられたわけだが、依然として区分可能な感覚器官という分析枠組みを土台にしている点では変わらなかった⁹。この感覚区分論に立脚する感覚の人類学 *anthropology of the senses* は、2010年頃もその枠組みをあまり変えていなかったのであるが、これに対して、サラ・ピンクとティム・インゴルドが批判を加えた。彼らと、前者の枠組みを代表すると目されたデヴィッド・ハウズとのあいだで、2011年に論争が繰り広げられたのである¹⁰。

もともと人間経験と感覚、社会の研究は、19世紀後半の進化生物学や社会哲学が絡み合う身体観、人間観、社会観、文化観の中で取り上げられ、時代精神の変わり目ごとに新説を伴って進められてきた経緯を持つ。このような流れの系譜により、社会学・人類学系のボアズ、デュルケーム、モース、ジンメルの立論はもとより、その後のマーシャル・マクルーハンによるメディア論も関与してくる——メディアの変化が人間の感覚の使用や基盤を変えるという議論も関係してくるわけである。とはいうものの、文化をとりあえず互いに独立した区分可能なものとみだてることが可能であった時代、区分可能な感覚の組み合わせによる感覚文化的経験においてどの程度使われ方に差が現れるのかという研究問題は比較的研究しやすいと思われた。そのため、比較文化研究の資料を参照して、区分された感覚の組み合わせ比率と文化的経験の文化依存性の問題が比較考察されるようになり、例えば、クラッセン (Constanz Classen) の著作にみられるように、感覚諸器官のモダリティの異なる組み合わせ

せという発想による比較分析枠組みが自ずと突出していった。また、感覚経験が文化依存様態として現れるのに、それを区分された文化非依存の感覚器官の作用態として捉えて済ませる傾向もあって、この点が後に批判されるわけであった¹¹。このような背景があったため、もともとはフランスのアナル学派に連なるアラン・コルバン (Alain Corbin) の匂いや音風景にかかわる歴史学の研究や、文化のメディア研究等にかかれていた学際的分野であった感覚研究が文化人類学において特に発展するようになり、かつ、感覚区分論と文化的エッセンシャルイズムが相互に連携する段階において多くの事例研究が実施されてきたのである。感覚区分による近似的理解ではなくて、分析的言語で感覚経験全体そのもの捉えるという研究作業は、ある程度議論や学説枠組みが初発の段階から次の段階に展開していかないと難しかったであろう。

2010年過ぎから大きく現れてきたもうひとつの傾向がある——非常に幅広い範囲で学際的な研究が行われるようになり、特に、メディア・アートを始めとするデジタル媒体による美的感覚的表現やコミュニケーション・メディアを介した人間の感覚的経験の理解が試みられようになってきている。人類学に惹きつけられて展開していた感覚研究が、テクノロジーと文化の相互浸透ともあいまった感覚の編成問題に直面し、メディア研究や歴史研究と文化人類学とを、再度、学際的に結集した諸研究へと拡大してきているのである。

ともあれティム・インゴルドやサラ・ピンクが示したように、感覚経験全体を区分しないでそのものとして捉える方法や用語を開拓しなければいけない、また、文化的な存在構成様態としての感覚経験を単に文化非依存の感覚器官の機能に還元しない、という志向をもつ次の段階の研究が次第に用意されるようになっていった。ピンクは、調査地の人々が感覚区分的な比喩を用いて感覚経験を描写するのは感覚喚起の比喩的民俗言語の使用であるとし、比喩を通して感覚経験全体を描写する接近法を認めている。ともあれ、感覚経験全体に現象学的人類学的に接近することを理論的目標としながらも、実際の研究動向としては、今まで触れられてこなかった感覚経験様相をえぐり出すことが重要とされ、そのための梃子として既存の感覚区分研究批判が機能している場合に新展開として評価される、ということであろう¹²。デヴィッド・ハウズも、多元感覚経験というキーワードで、全体の感覚経験をそのまま捉えようとする方向に研究を進めていくことになる。

こうして、2011年以降は、感覚受容体という用語や多元感覚という新しい用語が感覚経験という用語の使用と絡み合っ、総合的全体的感覚経験の多様なかたちの把握を志向する感覚人類学の次の展開が進んでいくようになったと言ってよかろう。

4. 感覚人類学の近年の新地平——多元感覚人類学への道筋の拡大

1980年の少し前、それまでの自然主義リアリズム的記述の発想による人類学民族誌が批判されるようになった。エドワード・サイードのオリエンタリズム批判に呼応するようにして、古典的人類学をひきずったモダニスト人類学が暗黙にもつ政治的前提基盤が指摘され、その批判が、ジョージ・マーカスらによって急速に展開されたのである。1970年代半ばのポール・ラビノーらの反省的民族誌論をさらにラディカルにした文化批判の脱構築人類学の登場であった。カルチュラル・スタディーズとともに、それまでの「植民地主義の擬態であるポストコロニアルな学問基盤に無自覚な人類学」が一斉に批判されたのである。これは人

類学学説史・人類学思想史上、文学的転回ないしテキスト論的転回と呼ばれる。この傾向は文字テキストでなく映像で描く映像人類学にも拡大していった。ところが、テキスト言説の脱構築的批判に終始し、みずからの認識地平を既存の認識パラダイムからずらすことによって、みずからは批判をまぬがれうる特権的認識理想地平を確保する戦略をとっている、ともいえるこの文学的転回は、90年代に入ると、一種の飽和状態による不毛の様相もはらむようになった。これに対して、存在論的転回とよばれる新しい研究パラダイムが1990年半ばに登場することになる。調査者を迎える側、すなわち被調査者が他己である調査者の文化を翻訳する過程と調査者が人類学的に他文化を翻訳する過程とを往復的に考察する志向のもとに、調査者と被調査者の非対称性を乗り越えつつ、人間や動植物、物質過程が互いに行き役（アクター）となって絡み合いながら、新たな社会文化的存在物を存在構成するありかたを描き出す——この志向のもとに、マリリン・ストラザーン、ヴィベyro・デ・カストロ、フリップ・デスコラ、ブルーノ・ラトゥールらが主導したのが、存在論的転回による人類学である。

感覚の人類学が急速に展開した1990年代の動きは、感覚論的転回と呼ばれる。テキスト言説の脱構築的批判だけでは、そもそも人類学調査の出発点である感覚経験に富んだ文化の追体験的理解という次元がおろそかになってしまう。経験次元の回復への志向が当然テキスト言説批判中心の人類学に対する逆批判を宿していく。感覚の人類学から感覚人類学への研究枠組の転換・新展開は、人類学の文学的・テキスト論的転回に対する代替志向を持つ人類学枠組みとして、人類学思想史的に重要な意味をもつのである。感覚人類学は、一面で現象学的思考をもち、始原経験への回帰志向と近代批判のロマン主義志向に結びついていっているが、他面では、新しいデジタル技術がもたらす新しい感覚経験のもつ効果や意味をも無視せず、正面からとりあげる志向もみせている点が特記されよう。

本稿ではこの点にはこれ以上踏み込まず、以下では、今回2度面会して最新研究の動向についてご教示をえたコンコーディア大学デヴィッド・ハウズ教授（The Concordia Sensorial Research Teamの拠点であるCentre for Sensory Studies 所長および同大学Milieux 研究所副所長）と彼の研究プロジェクトに焦点をあてて、感覚人類学の近年の新地平について記してみたい。その後は、感覚人類学分野のもうひとりの巨匠であるサラ・ピンク現オーストラリア・モナッシュ大学教授の研究プロジェクトを概観し、新しい大きな流れを呈示してみたい。

まず、デヴィッド・ハウズ教授の研究チームの近年の動向を概観してみたい。カナダの先住民の文化伝統の保持を第一の目的とし、今まで行われていなかった感覚人類学の思想手法による民族誌調査を行う研究が進行中である。そして、デジタル文化の浸透と進展、映像文化の浸透を合わせて研究し、感覚人類学の研究をさらに進展させる研究プロジェクトがまず掲げられているが、カナダの大学の人類学系とメディア研究系ならではの研究テーマであろう。また、先住民出身の研究者や芸術家たちを交え、学問分野の垣根を大幅に超える多様な分野の研究者がチームを作り、近代社会で細りつつある人間の感覚経験を取り戻し、さらには、感覚的経験をより深く多角的に味わえるような多元感覚的美的空間をインスタレーション等のアートを通して創造していくことも目的とされている。審美的経験の質を評価する学際的な研究方法の開拓も重要な研究テーマとなっている。

回廊に、音や音楽が流れ、美術作品やインスタレーションが置かれる環境を創成するとい

う研究課題もある。また、タブレットを感覚人類学の観点から見てもっと感覚になじむものに改良する研究、あるいは、ブリティッシュ・コロンビア州のワインの味をもっと味わい深くしていくために感覚人類学の研究調査を行うという課題もあるし、消費者がもっと感覚を通して、購買意欲を高めることができるように商品展示するといった経営人類学的研究に感覚人類学を組みあわせる試みもある。音楽を用いた物語ビデオを、感覚経験をより深く引き出すという観点から評価し、新しい作品をどう作れば良いかという研究プロジェクトもある。こられの研究群のように、新しい環境を創り出していくために、感覚人類学研究を行うという姿勢が強く見られるのが、デヴィッド・ハウズを中心とした研究者たちの志向のひとつの特徴であろう。

法律の分野でも感覚人類学の研究が展開されている。裁判の過程で証拠として採用される物事は、法文化の世界に特徴的であるような感覚経験に裏付けられている（たとえば先進国で警察犬を使って臭覚によって探し出された証拠を法的に有効と認めるところにも法の世界と感覚の関係がうかがわれるし、部族社会では描画や歌やことわざの詠唱、舞踊が慣習法による判定で採用される証拠となっているなどの例がある）。この点をさまざまな国で調査して比較し、また時代による変化を研究するプロジェクトが組まれている。衛生に関わる法は、法律で定義された不潔な状態を排除しようとするわけであるが、それは、感覚人類学から見ると特定の範囲の感覚経験を禁止する試みに他ならない。法的な正義は抽象的な概念だが、私たちは直観的なイメージによって感覚的感触を込めながら、全体としての抽象的な法観念をつかんでいる、と考えられる。そのためこの点でも、感覚人類学的研究が法学、社会、人間の社会科学的理解のために不可欠となるわけである。

デヴィッド・ハウズ教授は、この10月の筆者との面談のなかで、これからはとくに、都市を人々がどう感覚的に経験しているのかという問題、その一環として、建築空間（病院、裁判所、市場空間など）、なかでも、美術館が多元感覚経験を人々に提供する場となりつつあることについて、感覚的に経験を追体験する参与観研究を用いて研究を進める、と述べていた。すでに彼が、世界的に評価の高い人類学年報誌に、多元感覚の人類学をキーワードとし最新の論文を書き上げたことを述べたが、簡単に記した上記の感覚人類学の研究群は、10年前までの諸感覚を別個にとりあげて比較するような研究枠組みを脱し、多元感覚的経験全体をそれ自体として焦点化し、また、感覚人類学の調査者自身が自分の感覚を使ってどう経験するかも記述する民族誌研究をおこなっていく志向をもつ。彼自身、2011年7月に筆者が案内したおり、鎌倉の長谷寺の大仏の中に入ったときに感じた感覚的経験をよく覚えており、自分の論文の一部でそのときの感覚経験を反芻している¹³。さらには、彼が主導する研究集団は、メディア・アートなどのデジタル情報技術とアート経験が会う地点で、人々が感覚経験を拡大する事例研究をも強く志向している。また、Milieux 研究所のひとつのプロジェクトでは、コンピューター・サイエンスの研究者が服飾デザイナーたちと共同で、ウェアラブル（着用可能）な小型のPCを服飾に組み込んでデザインするウェアラブル・ファッションを作成しており、服に縫い付けられた多数のICチップ様の微細回路が独特のデザイン模様をなす服飾作品がファッション界の新しい潮流と評価され、現時点でスペインの美術館を巡回し、その後は中国の美術館に巡回予定とのことであった（この研究所のシンポジウムには日本のメディア・アーティスト集団であるチーム・ラボが毎年参加し、この研究所で学んだ院生がお台場のチーム・ラボに就職しているということであったし、ロボットにオペラを歌わせる

プロジェクトで有名な東京大学の池上高志教授も毎年、研究会に参加するとのことで、文化・技術・メディア、感覚の学際研究領域において、ちょっとした世界的研究ハブになりつつある様子であった)。近年、多元感覚人類学の枠組みへと脱皮して以降、上記のように研究課題が拡大していく道筋がみえるのである。

このような応用的研究方向は、感覚人類学の他方の雄であるサラ・ピンクの一連の研究にも見られる。まず、彼女が提唱する感覚に寄り添った民族誌の方法について簡単に述べる。

彼女は、参与観察の場でその場の人々と生身の係わりを行いながら、映像人類学的手法で、その場の人々が経験しつつある物事や人との相互作用を録画していく。その録画のやりかたは、調査者自身が人々の経験の感触をなぞるようなやり方で——彼らにいわば感覚教育をうけるようなかたちで——行うのである。そして、事後的にその録画動画をそのときの人々と一緒に視聴しながら、自然に湧き上がる人々の反応を受け止めようとするのである。特に、人々と一緒に歩きながら思い出の場所へ向かっていく過程に、あるいは、エネルギーの無駄遣いが問題となっている現場に赴く過程で、調査者が非調査者たちと綿密に寄り添っていくことを重視している。すなわち場所から場所へ移動するプロセスで経験される感触を、調査者自身がみずからの身体感覚で（非調査者たちの感覚経験と同調しながら）受け止めていくことを重視しているのである。これが、感覚に寄り添った民族誌の方法である。参与観察をする人類学者が自分の感覚を人々の感覚経験に合わせて同調させていくことが重要視されているのである。彼女のスペインの町のフィールドワークでは、町の人々がカメラやビデオを一部用いて自分たちの生活の記録と記憶を作り上げていた。彼らの生活文化に映像技術の使用が組み込まれているわけであった。そのようなフィールドでは、彼女が人々と歩きながら動画に記録するという行為が、町の人々の場所にまつわる深い記憶や感覚的経験を引き出すようすがとなったのだ。デジタル・カメラの技術を媒介にして人々の感覚世界が共有されるのである。こうして、「感覚に寄り添った民族誌」によって、彼女は社会文化人類学的調査論を新しく再構築する道筋を示したのであった。

旅に出て人々と道すがら交流してはインスタレーションを作成する芸術家がいるが、2010年以降、そうした歩く行為をアートの実践として行う芸術家にサラ・ピンクは注目するようになった。識ること、感覚でうけとめることに関し、歩くという経験の包絡的全体性（歩く、動くことがすなわち識ることそのものの過程となっている）から考察した現象学的人類学ティム・インゴルドの経験と知覚の枠組みを援用し、映像人類学者・感覚人類学者の彼女は、以前は主観的として退けられていたとアート実践を、民族誌実践の別の形として捉え直したのである¹⁴。

サラ・ピンクは、上記の感覚人類学的映像人類学的手法をエネルギーの節約が課題となる現場での問題解決の発見と手だてとして用いている。エネルギー問題に関わる現場の技術者や関係者たちの現場での感覚的経験の次元をなぞり出すことにより、それまでは気がつかなかったエネルギー消費過程の問題構造がつかめるようになり、課題解決の道が開けたのである¹⁵。

5. 情報社会のさらなる進展によって問われる多元感覚経験の課題群

残された紙幅の範囲で、現在はオーストラリアのモナッシュ大学デザイン学部に拠点を移したサラ・ピンク流の感覚人類学がさらに大きな拡大をみせている姿を簡単に検討してみた

い。人間の感覚に寄り添った音風景の観点から道路騒音をデジタル技術によって変形する研究、スマートフォンと自動移動についての関連研究だが、北半球先進国とは異なる南半球型の将来像を模索するプロジェクト（人間が自分の身体の移動を自分自身でたどりながら自動的に運ばれる身体をどのように感覚的に経験しうるかについての研究でもある）、大気と人々、時間、出来事との関係を捉え、なかなか把握しがたい大気に依存する人間が生活環境のなかで大気との経験的関係を将来どのように展開しうるのか、という研究、スクリーン画面を見ないやり方で身体装着した小型のAI コンピュータやモバイル、IoT との、自然感のある相互作用の未来像の研究、デジタル・メディアに関わりつつ、それを通して進められる創造的芸術的技術的実験の社会的イノベーションについての研究、冒頭で述べたエネルギー節約の実用的研究をもっと大きく一般化した研究課題（住民の人々が必要なエネルギー問題をデジタル・エネルギーの未来という枠組みにたち、コンピュータと人間の相互作用と創造性の観点に照らして研究する課題）、等々である¹⁶。

ここで筆者が印象を強くもつのは、情報工学とデザインを結びつけるデザイン人類学を展開しているサラ・ピンクの革新的パイオニアの人類学の構想である。

映像人類学から出発したサラ・ピンクが感覚人類学へと研究を掘り下げ、さらには、IoT とスマート化による産業革命 4.0 や情報社会の次の段階の社会 5.0 への進展段階へと向かう社会——情報技術革新の進化により、AI やロボット装置が人間の諸活動と絡み合っ社会経営が営まれ、仮想空間と現実空間が融合した環境のなかで経済発展と社会的課題の解決が試みられる社会——すなわち、情報社会のさらなる進展で現れつつある新環境が特色となる社会およびそこでの人間経験にかかわる諸問題の広がりや研究する新しい展望を切り開いているのである。情報社会の次の段階にむかうスマート・シティ環境をも調査研究プロジェクトの対象とし、そこにおける人間経験をあつかうサラ・ピンクの一連の研究は、膨大な広がりを見せている印象を受ける。とはいえ、それらの研究課題を行う研究方法の枠組みは、これまで触れてきた多元感覚に焦点をあてる感覚人類学の幅のなかに収まっているのである。しかも、実用的な成果をあげることを目的とした研究という性格を色濃く持っている。現代や近未来に重要となりつつある実際の問題に取り組み取り組むなかで、アカデミックな基礎研究も同時に発展するという好循環がここに見られるのではなかろうか。

2019年7月、グーグルの親会社であるアルファベット傘下の Sidewalk Labs が、実証実験を意図したスマートシティ・プロジェクト「IDEA」の詳細な計画を発表し、カナダのトロントでスマートシティの形成を進めていることが報道された。また、その後、トヨタも同様のコネクテッド・シティ構想を発表し、富士山麓の静岡県裾野市の工場跡に2千人が住む新都市で「生活する実験室」とするとのことである（ベトナムの会社と合弁で住友商事もハノイ市ドンアイン区の土地をスマートシティとして開発を計画）。もののインターネットIoT やAI, ロボットなどの知能機械、自動運転によるモビリティ、サイバー仮想空間と現実空間、仮想現実装置等々が人々の生活でどのようにうまく協働しうるのか、そのための実証実験と得られるデータの蓄積と分析が行われる計画である。このような実証実験に、サラ・ピンクやデイヴィッド・ハウズらの多元感覚人類学による研究調査が独自の貢献を果たすことが上記に述べたプロジェクト課題群のこれまでの成果から十分予想されるのである。

本学情報マネジメント学部設立趣旨に照らしてみたと、上記のべた研究課題の一部でも、本学の教育研究に取り入れることができないかという思いが湧いてくるのを筆者は禁じ

得ない。

感覚人類学の新しい研究の展開の流れは今後どのように進んでいくのだろうか。この問いを再度記した上で、この研究ノートを閉じたい。

注

1) エドワード・T・ホール『かくれた次元』日高敏隆・佐藤信行共訳、みすず書房、1970年、221頁。アラブ系の人々は家では個室を持たず、密接空間に互いにたむろする傾向がある点なども、文化的習慣的感覚様式の習得に関係してくる。なお、中世ルネッサンス期のイタリアでは、商業文化が身体に浸透し、取引する物の重さ、嵩、空間の奥行き長さなどを感覚で直観的につかむ習慣実践が浸透していた——この時期のイタリアの人々は空間の感覚的把握の力が優れていたのだが、この感覚的空間把握力こそが、イタリア・ルネッサンス期の画家の絵の構図デザイン構成力の基盤となっていたという研究がある。感覚の感受性のかたちが文化的感覚慣習力となっているが、そのありかたは時代によって変化するのである。Michael Baxandall *Painting and Experience in Fifteenth Century Italy: A Primer in the Social History of Pictorial Style*. The Second Edition, Oxford University Press, 1988.

2) 筆者がD・ハウズ教授に2019年10月に会って訊いたところ、*sensorial anthropology* は、*social anthropology* にひっかけて普及させたかった言葉だったので自分が唱えたのだが、結局、だれも使わず普及せず、*sensory anthropology* のほうが広範に用いられているので、自分もそれに従わざるをえなくなった、ということであった。なお、同教授は、かつて英国 Merton College, Oxford University の社会人類学者 Rodney Needham (レヴィ=ストロースの批判的理解者であり、日本にも1982年に来日し、当時若手助手であった筆者も会食面談の機会を得た) のもとで社会人類学を学んでいた時期があり、そのため、英国流儀の“*Social Anthropology*”という用語に愛着があったのである。

3) a> Multi-Sensory Aesthetics and the Cultural Life of the Senses: The Sensory Turn in Anthropology (多元的統合感覚と生・美の諸相：人類学・美学の境域の地平)：2011年7月30日(土) 13:00～17:15：慶應義塾大学三田キャンパス 東館 6F G-sec Lab <http://www.keio.ac.jp/access.html> [Keizo Moiyasaka "From Sensory Experience to Cultural Ritual: The Sensory Turn in Anthropology"; David Howes (School of Graduate Studies, Concordia University) "Multi-Sensory Aesthetics" ほか。]

b> Keizo Miyasaka "Positioning Sensorial Anthropology in Relevance to Logic and Sensibilities Research." CARLS series of advanced study of logic and sensibilities

(Centre for Advanced Research on Logic and Sensibilities, the Global Centers of Excellence Program, Keio University) No.5, pp.197 - 220, 2012. なお、この拙書で掲げた文献の多くは本稿では割愛した。

c> Special Issue: "Multi-Sensory Aesthetics and the Cultural Life of the Senses" Guest Editor: Keizo MIYASAKA, *Ars Vivendi Journal*, No.3 February 21, 2013.

d> 2009年9月17日、The 1st International Conference on Visual Methods, Clothworkers Centenary Concert Hall, University of Leeds, England, UK の筆者発表・司会のセッション(分科会 "The Visual and Academic Turn in Contemporary Japanese Academia.")において、サラ・ピンク(当時 Professor of Social Sciences, Loughborough University, U.K.) と討議する機会をもったあと、同じ年の12月14-15日の筆者企画の小規模国際シンポジウム「映像人類学とアート——映像とアートが紡ぐ記録と表現の新たな関係：“Art & Visual Anthropology--Frontiers of Anthropological Expression: Towards a New Relationship between Observation and Expression Using Visual Images and Other Art Forms” (2009年12月14日(月)・15日(火)、三田キャンパス・東館 6F G- sec Lab / 東館ホール / 北館ホール、主催：

慶應義塾大学アート・センター) に招聘予定の企画を立てた。サラ・ピンク教授にはこの企画のために論文 "Walking, Anthropology, Art, and Documentary Practice: Thinking about Movement in Ethnographic Representation" を用意していただいたものの、病欠となったため、12月15日に同論文をシンポジウム討論者と共有して討議した【宮坂敬造「映像人類学とアート」人類学的表現の新地平を求めて——映像とアートが紡ぐ記録と表現の新たな関係」、慶應義塾大学アートセンター年報、No.17, 2009/2010、2010年4月において Sarah Pink の論点を解題】。さらにそのあとの2013年11月21日、Workshop on Asia Pacific International Ethnographic Documentary Festival, University of Melbourne, Sidney Myer Asia Centre, 2F. において、筆者とサラ・ピンク教授(当時、Professor of Design and Media Ethnography, RMIT University, Australia) は5人のパネラーのふたりとして登壇し、討論・交流した。ティム・インゴルド教授(Professor of Social Anthropology, Chair of Social Anthropology at the University of Aberdeen, U. K.) は、彼の以前の指導学生が筆者の研究グループの研究員になったことに関して、2012年3月1日の同教授の東京での講演後に打ち合わせをする機会をもったが、そのおりに、感覚人類学の論争についての補助的情報を得た。

4) インゴルドは現象学的人類学者と目されているが、彼自身はメルロ＝ポンティの英訳版をかつて手にとったとき、まったくなにをいっているのかピンとはこなかつと語った。彼自身は狩猟採集民がおこなう道具の制作などの活動を参与観察するうちに、いわば知らず識らずのうちに現象学的な見方をもって理解してそれまでの通説の欠点を突破していくうちに、メルロ＝ポンティの思考法が了解しうるような自分自身の独自の認識方法を編み出したといえるとのことであった。彼は、anthropology of the senses の初期の認識戦略は間違っていると立論するが、ピンクは、筆者と同様、初期の開拓的時期には単純化した認識戦略が果たしうる役割がそれなりに小さくなかったと論じている。

5) David Howes "Multisensory Anthropology," Annual Review of Anthropology, Vol. 48, pp.17 ~ 28, 2019. なお、D・ハウズ教授によると、'Multisensory Anthropology' という言葉は上記人類学年報誌の編集委員会の人類学者から示されたので、この用語をそのまま使ったのだということであった。脱稿したのは本年2019年5月であった。

6) 筆者は情報人類学を構想した梅棹忠夫などの立論と科学技術人類学の最近の知見を基軸にして、本学の科目<先進技術と精神生態の人類学><情報メディアとデザインの文明論>の講義シラバスを探索的な部分も含めて開拓してきたが、その延長線上に次のような仮想的構想をもつようになった——現在は、情報社会Ⅱから情報社会Ⅲへの転換移行期にあり、この時期には、ITCのさまざまな新技術に通底する特有の情報技術類型があらわれており、それが——ネットワーク社会の変動で特徴づけられる社会関係の転換方向を導くような——社会情報技術類型の雛形になっていると考えられることに思い至った。このような雛形を基底におきながら、この転換・移行期の重要課題は、とくに先進国においては経営、医療など、各分野におけるAIの社会実装であると思われるのである。このような見取り図を仮に設けると、サラ・ピンク教授がおこなっているデザインと新創発技術の感覚人類学的研究の現代的意義が深く理解できるようになると考えている。

7) レヴィ＝ストロース『野生の思考』大橋保夫訳、みすず書房、1976年。また、前言語的叫びや、擬音前で感覚に張り付いたアイコン的準単語については、最近の存在論的転回と筆者のひとつの専門であるグレゴリー・ペイトソン研究を統合させた人類学者の著書から引きたい——エクアドルのアマゾン川上流域にあたるナボ川上域アヴィラ近辺には、自身をルナと呼ぶキチュア語を話す人々が居住しているが、枝を落とす突然の物音に驚いた獲物の豚が水辺に慌てて逃げ込む様子を感覚でありありと感じさせる言葉ツブ(準一単語、記号学者チャールド・バースの言うアイコン) がその例にあたる【エドゥアルド・コーン『森は考える——人間のなるものを越えた人類学』奥野勝巳・近藤宏監訳、亜紀書房、2016年、p.52 ~ 78。(なお、Eduardo

Kohn マッギル大学人類学部准教授が、フィールドワークの地の森の感覚を現地の録音や絵、写真、グラフィック・アートで聴衆に伝え、感覚経験を喚起する独特の工夫を凝らした1時間のコロキウムと、続いての2時間近くの討論に筆者は参加し [Eduardo Kohn "Forest for the Trees: Spirit, Psychedelic Science, and the Politics of Ecologizing Thought as a Planetary Ethics." Culture & Mental Health Research Unit Meeting, March 27, 2019, Institute of Community & Family Psychiatry, Room 218B, Jewish general Hospital, 4333 Cote-Ste-Catherine Road, Montreal]、また、その後の9月下旬に同先生と2度の個別面談機会を得た)。これはオノマトベ的な感覚模倣性をもつが、オノマトペ以前の言葉の発生始原をはらませた前言語的なイコンの多重感覚喚起準単語と考えられる。オノマトペからさらに通常の言語に近づくと、感覚に由来する言語を比喩的に使用する比喩性感覚言語があげられよう。簡単な例が、土居健郎『甘えの構造』弘文堂、1971年〈増補普及版、2007年5月〉で論じられたように、日本語文化圏では、味覚の甘えを人間関係の有り様・性質の感覚的比喩に使う例があげられる。また、九鬼周造『いきの構造』岩波文庫、1930年、で示されたように、武士の文化に拮抗した江戸の町人文化に由来し、大正期まで日本の関東文化圏に存在した生活感覚は、その場の感覚経験として息、気、生気が感じられるかどうかによって価値を置いた文化であり、それが感じられない場合に我慢をして意気地の感覚を発達させ、現実の世界とは別用の美的世界を志向した文化であった。

ここで示した病気治しの事例の出典は、Angelika Gebhart-Sayer "The Geometric Designs of the Shipibo-Conibo in Ritual Context." *Journal of Latin American Lore*, 11(2), 1985: 143-175. David Howes "The Aesthetics of Mixing the Senses." *Luxembourg Philharmonic rainy days catalogue*, 2008:71-85. シャーマンの人物が感覚に敏感なことが一般的にいえるであろうが、一例として韓国・済州島のシンバン(神房)に触れる。シンバンは憑依を伴わない、いわば演劇的儀礼で災厄避けのお祓いを行う民間巫覡だが、儀礼の前にその場所の気配のなかに祖霊を始めとする神々の霊をひとひしと感じ、それらの大量の霊が自分の体の開孔部から血液のなかにどんどん入って自分の体を巡るのを感じると筆者に語った。済州島の各地でも、日本の大阪や青森、東京の地で儀礼をやったときも霊が体内に入ってくれた。ボストンにいったことがないのでなんともいえないが、いってみればやはり霊がたくさん体内に入ってくれるのではないかと筆者に語っていた。木曾福島御嶽講の行者は、(御嶽噴火休止期のことであるが)御嶽山黒澤口からの礼拝登山の途中で足の調子が悪くなっていった参加者の信者のつらさを自分の心身に感じとって、遠くにいるにもかかわらず、その人の面影が自分に知覚されたと語った。また、そのように人に同情するときには、やや夢幻的な感覚を感じ、肩のあたりに軽い震えを感じるのであった。済州島のシンバンもこの御嶽講の行者も、アマゾンのシャーマンのように幻覚性植物の摂取はまったくしない(映像人類学者・太田光海 2019年制作の人類学的ドキュメンタリー映画 Kanarta では、北西アマゾン・シュアール族のシャーマンの息子セバスチャンが、宗教信仰が一面薄れて変化する村で、自分をシャーマンとして自覚的に立て直す過程が活写されているが、彼が、アヤワスカを摂取して、右肩から始まるが体全体が震え、幻覚をみている場面も収められているのに対し、上述の行者は幻覚性植物をなんら摂取しないが提示する身体症状の一部が興味深いことに類似している——上述の一部の点については、以下で論じた。Keizo Miyasaka "Embodied Experience and Personhood: Towards a Cultural Study of Logic and Sensibility (implications from Trans States)," *CARLS Series of Advanced Study of Logic and Sensibility*, 5, 2011: 197 – 220.)。精神病理学的にいえば異常な幻覚とみなされようが、日常生活に十二分に適応している点からして、いわゆる精神障害をもつ状態とはいえないはずである。行者のほうは、ふだんは自営の菓子職人としての仕事をしているが、菓子の味をおいしくするために材料から作成する作業過程を、職人的感覚を研ぎ澄まし、綿密に取り扱っていく。御嶽講の神降ろしの儀礼のときも、まったく同じような職人的感覚を働かせ、丁寧に儀礼の過程を綿密にすすめて

いくのであった。筆者があつたことのある芸術系大学の若い研究者の感覚経験も興味深かった。彼女は、自分の背中に流れる血液の循環移動を感覚することができ、血流の流れを感覚しつつそれを音楽の作曲に転化することができるとのことだった。複合的感覚の動きの知覚を音楽の流れに置き換えるような、一種の共感覚を作動させることができるのである。最後に、触れておきたいのは、カナダの作曲家でサウンド・スワイプ論を展開したレーモンド・マリー・シェーファーの環境オペラの実演のことである。オンタリオ州の奥まった湖の四方八方の岸辺に三々五々集う聴衆が、船で移動するオペラ団の歌唱と音楽実演を湖と森の自然の環境のなかで聴き入るかたちの全体環境音楽、を彼は企画・指揮する（「マリー・シェーファー講演会 作品を語る」、1995年7月9日。慶應義塾大学三田キャンパス、慶應義塾大学アート・センター | 日本サウンドスケープ協会・共催、および、1995年10月トロントでのマリー・シェーファー作曲演奏会の機会に筆者が聴いた質疑から）。ハウズ教授は当然のように、マリー・シェーファーのこのころみを感じ人類学的実験として扱っている。

8) Devon E. Hinton, David Howes, & Laurence J. Kirmayer "Toward a Medical Anthropology of Sensations: Definitions and Research Agenda," *Transcultural Psychiatry*, Vol.45(2), 2008:142-162. フィリピンでは、病気のことを *sakit* すなわち痛みという言葉で包括的に表すが、典型的には、障りのある精霊が患者の体内に小石や小動物などを注入してしまったために生じた内受容性の感覚で病気が特徴づけられる。なお、複合的な病苦の感覚は言葉に表すことができない点がさらに輪をかけて患者を苦しめる問題を、医療人類学は重要問題として焦点化している。Byron J. Good, *Medicine, Rationality, and Experience: An Anthropological Perspective*, Lewis Henry Morgan Lecture Series, Cambridge University Press, 1993. また、宮坂敬造「トラウマの心象風景と芸術——豪州メルボルン、ダックス・センターでの出会いから」（慶應義塾大学『アートセンター年報』（2013-14年度）、第21号、2014年4月：pp.117-122）においてもこの問題を取り上げた。

9) マーシャル・マクラーハン『グーテンベルグの銀河系』森常治訳、みすず書房、1986年。アーウィン・パノフスキー『ゴシック建築とスコラ学』前川道郎訳、ちくま学芸文庫、2001年。ウォルター・オング『声の文化と文字の文化』桜井直文他訳、藤原書店1991年。

10) Sarah Pink "The Future of Sensory Anthropology/the Anthropology of the Senses." *Social Anthropology* 18(3), 2010: 331-333. David Howes "Response to Sarah Pink." *Social Anthropology/Anthropologie Sociale*, 18(3), 2010: 333-336. Sarah Pink "Response to David Howes." *Social Anthropology/Anthropologie Sociale*, 18(3), 2010: 338. David Howes "Response to Sarah Pink." *Social Anthropology/Anthropologie Sociale*, 18(3), 2010: 338-340.

Tim Ingold "Worlds of Sense and Sensing the World: A Response to Sarah Pink and David Howes." *Social Anthropology/Anthropologie Sociale*, 19(3), 2011:313-318. David Howes "Reply to Tim Ingold." *Social Anthropology/Anthropologie Sociale*, 19(3), 2011:318-322. なお、次の書物でインゴルドは、ハウズの感覚の人類学へは批判をすでに記していた。Ingold, T. *The Perception of the Environment: Essays on livelihood, Dwelling and Skill*. London: Routledge, 2000, p.251-253.

筆者が2011年に7月に東京でハウズ教授に会ったときには、ふたりからの批判に大変興奮し、インゴルド教授の批判論文の草稿版を学術誌編集部から事前に受け取って東京への旅行鞆に持参し、反論を練っている様子であった。日本の研究者に対しての情報としてここで記しておく価値があると思われるのは、北米系の研究者が自説を攻撃されると、批判者に対して対抗意識をむける傾向があるのに対して、イギリス人研究者の場合は自説が批判されても、さして批判者に対して興奮しない傾向があるという点である。先輩人類学者から聞いていたことだが、イギリスの社会人類学者の Edmund Leach と南アフリカのユダヤ系出身

で後にケンブリッジ大学教授となった Mayer Fortes とのあいだで長く論争が続いたことがある。単系親族に分析的にみいだされると後者が考えた相補的連帯への着眼の是非をめぐる論争であった (Leach とユダヤ系アメリカ人の精神分析的人類学者の Melford Spiro とのあいだで続いた処女懐胎論争 [後者は少規模社会の中にある処女懐胎神話はその人々が生物学的な妊娠原因について無知であることの相関物だとした] とともに、人類学理論の論争史のひとつをなす有名な論争である) ——両者は同じ大学の同僚であったが、論争は長く続けたものの、その間、頻繁に昼食をともにし、ずっと仲良く談笑しているということであった。筆者がインゴルド教授に 2012 年の 3 月 1 日に会って、この論争のことを話題に出したとき、同教授は、どうもハウズ教授が感情的になって反論している印象なので少し困惑している、という感想を漏らしていた。ハウズ教授に今年の 10 月にあって訊いてみたところ、ふたりの立論には自分に対する誤解があるので、依然として納得していないこと、それでも論争後にインゴルド教授夫妻がモントリオールの学会に来たときに個人的にモン・ロワイヤル岡のレストランで会食したこと、そのときにインゴルド教授は彼の妻もいたこともあるが、論争のことはまったく触れようとしなかったこと、を話してくれた。また、ピンク教授ともウェンナー・グレン財団後援のスペインの学際会議で一緒になったが、そのときも論争のことはまったく話題にのぼらず、ピンク教授は非常に友好的であった、ということであった。なお、このような事態は単に逸話的に参考になるというだけではない。人類学の論争史・理論史・思想史の理解の礎のひとつとして、欧米間の人的交流と軌轍の文脈、および国民国家に一部立脚するために国柄の様相もつ学派のローカルな特徴の把握も重要となるので、逸話を軽視すべきではないと思われる。この点に関係した社会学者 Johan Galtung (1960 年末からオスロ大学を拠点として進めた平和と紛争研究、未来学研究で著名) の以下の論文を参照 "Structure, Culture, and Intellectual Style: An Essay Comparing Saxonic, Teutonic, Gallic, and Nipponic Approaches" *Social Science Information*, 20 (6), 1981:817-865.

11) Constance Classen *The Deepest Sense: A Cultural History of Touch* (Studies in Sensory History) (English Edition), University of Illinois Press, 2012. などに、その傾向があらわれている。なお、David Howes *Sensual Relations: Engaging Senses in Culture and Social Theory* University of Michigan, 2003. では、アラン・コルバン (Alain Corbin) の匂いや教会の鐘と時の感覚にかかわる中世歴史研究や、マルクス、アルチュセールにも触れ、感覚研究の源流をさまざまな文献に探っている。David Howes & Constance Classen *Ways of Sensing*. Routledge, 2013. は、第 2 段階の感覚人類学に向かっていく枠組みの拡大がみられる——国家の管理階層が感覚経験の範囲資源を従属階層や少数民族集団に対して制限してきた中世以降の歴史的経緯から、感覚秩序形成と社会秩序の形成が連動している様相などが指摘されている。なお、本稿では、感覚研究に関与した古典的研究や、アナル学派の歴史的感覚研究、Paul Stoller (ロマン主義的ともいえるが、呪術師の豊かな多元感覚世界を活写し近代合理主義的理性文明を批判した、*Sensuous Scholarship*, University of Pennsylvania, 1997.) や Thomas J. Csordas (*Embodiment and experience: The Existential Ground of Culture and Self*, Cambridge University Press, 1994) らの身体現象学的人類学の流れによる感覚研究、また、時代により許容され強調される感覚経験が変化し、そこには歴史的環境に配置された事物・テクノロジーによる感覚の編成の変化がある点と、この問題を歴史の記憶の政治学に結びつけて論ずる Nadia C. Seremetakis が担う流れにまでは検討を上げなかった。

なお、Thomas Porcello, Louise Meintjes, Ana M.Ochoa, & David W. Samue "The Reorganization of the Sensory World." *Annual Review of Anthropology*, 39, 2010:51- 66. は 2010 年時点で多くの文献を踏まえたレビューとして出色であるが、筆者は論争に焦点をあわせつつ、段階的展開、感覚論的転回、調査実践に規矩をあわせた修正現象学的調査方法論、デジタル技術による人工機器を介した人間の感覚編成を必ずしも否定的にだけみない方向性、という諸点からのレビューを試みた。

12) Keizo Miyasaka, Ibid, 2012. で純粋現象学的方法の実用的限界について指摘した。デジタル技術を媒介にして自然肉体での知覚・感覚が少なくとも部分的に編成されていく時代において純粋現象学的方法は修正される必要性がある点、また、民族誌的論文形式で他文化の人々の集積的間隔経験様態を記述・分析する場合、言語による記述がひとつの土台となるので、感覚経験全体を捉えるには感覚喚起的な隠喩的表現によるレトリック方略が用いられることになる点も指摘した。また、デジタル映像音響再生技術のさらなる進歩により、今後、迫真的質感のクウォリアが飛躍的に向上するであろうし、たとえその迫真性が自然肉体知覚を擬態する編成によるずらしの結果であったとしても、感覚経験を伝達する技術として被調査者、調査者を問わず将来多用されていくであろう。こうしたことから、今後、人類学的民族誌の伝達形式が大きく変わることも予想されよう。

13) David Howes "Introduction to Sensory Museology," *The Senses and Society*, Volume 9, Issue 3, pp.259-267. 2015. David Howes, Eric Clarke, Fiona Macpherson, Beverley Best & Rupert Cox "Sensing art and artifacts: explorations in sensory museology," *The Senses and Society*, Volume 13, Issue 3, pp.317-334, 2018. なお、カナダのマギル大学の秘書たちは9月に数週間休暇を取って外国に旅行する人たちがちらほらみられたのだが、彼女たちは、ウィーン、ザルツブルグ、リヨン、マドリッド、フランクフルト、プラグなどで例外なく美術館をいくつか梯子して訪れていた。グローバルなハブ都市において、美術館の集客力がその都市の競争力を表す指標となっている根拠が実感された。筆者も休日に知人の文化ジャーナリストとモンリオールの近代美術館をおとなったが、エジプトのミイラと発掘物の展示がコンピューター・グラフィクスやメディア・アートによる映像説明と併置されている展示形式が、非常に豊かな感覚的経験を伴った発掘物理解をもたすことを実感した。今後のデジタル技術や多角点遠近法撮影と5G技術によって、ますます迫真的質感クウォリアが高まり、そうした将来の時代、美術館の多元感覚経験喚起力がますます高まっていくことであろう。一方、病院のほうは消毒の匂いや機能的一方で殺風景で現代では非感覚的視覚優位の空間ではあるが、それだけに将来は多く変貌する余地がある。

14) d> で述べた慶大シンポジウム提出論文、Sarah Pink "Walking, Anthropology, Art, and Documentary Practice: Thinking about Movement in Ethnographic Representation," December, 2019、および、Sarah Pink, Phil Hubbard, Maggie O'Neil and Aaln Radley "Walking across disciplines: from ethnography to arts practice," *Visual Studies*, Vol. 25, No. 1, pp:1-7, April 2010. Ingold, T. *The perception of the environment*. London: Routledge, 2007. Ditto. *Lines: A brief history*. London: Routledge.2007. Sarah Pink *Doing sensory ethnography*. London: Sage, 2000. なお、彼女の映像人類学の方法については、以下で論じたことがある——宮坂敬造「映像人類学の理論と実践、その新たな展開の現在——デジタル映像技術の革新と新しい世紀の映像人類学の課題——」(新井一寛、岩谷彩子、葛西賢太編『映像にやどる宗教、宗教をうつす映像』せりか書房、246～273頁、2011年6月発行 [http:// www.serica.co.jp/305.htm](http://www.serica.co.jp/305.htm))、Sarah Pink "Digital-visual-sensory-design anthropology: Ethnography, imagination and intervention," *Arts and Humanities in Higher education*, 13(4), 2014: 412-427.

なお、Sarah Pink "Sensory Digital Ethnography: Re-thinking 'Moving' and the Image." *Visual Studies*, 26(1), 2011: 4-13 でも同様の議論を展開しているが、現象学的人类学者インゴルドの理論枠に準拠し、イメージと「動き」について再考している——映像は視覚優位のイメージとされがちだが、映像の作成のときに作者がはたらかせた感覚受容の過程の動き、さらに、視聴者が静止写真であってもその映像を感覚的に受容する過程において、いわば歩いていく動きの過程のように、点ではなく線の連動する系列、点の集積としての放射形態のネットワークではなくて、多元感覚が包絡的にからみあった過程としての包絡過程メッシュワークの動きに沿って、映像を感覚経験としてうけとめる点を議論している。連動的に動いていくことその

ものが識ることを生成している点、また、そうしてみると、デジタル的イメージであっても、それが実在するモノと同様、「物質性」を呈していることを述べている。すると、デジタル技術によって提供されている世界を人々は、上記に述べたイメーの多元感覚性、そこから包絡的に紡ぎ出される物語、歌、そしてそれらを生成させる「場所」のさなかを動くことによって経験している姿が感得される。そして、人々の動く経験のかたちは、民族誌の方法によって理解可能となるのである。この枠組みにたつと、デジタル健康機器を使って自分の身体をデータを通して把握する現代人の自己感覚も感覚人類学的民族誌によって理解可能となるため、デジタル情報通信の進化による社会文化変化と人々の対応法も研究可能となる。

15) Sarah Pink "Engaging the Senses in Ethnographic Practice," *The Senses and Society*, 8(3), 2013:261-267. Kerstin L. Mackley & Sarah Pink "From Emplaced Knowing to Interdisciplinary Knowledge Sensory Ethnography in Energy Research," *The Senses and Society*, 8(3), 2013:335-353. K. Rutten, An van. Direnderen & R. Soetaert "Revisiting the Ethnographic Turn in Contemporary Art," *Critical Arts*, 27(5), 2013:459-473.

16) Sarah Pink "Ethnography, Co-design and Emergence: Slow Activism for Sustainable Design." *Global Media Journal*, 9(2), 2015:1-10. Sumartojo, S., & Pink, S. *Atmospheres and the Experiential World: Theory and Methods*. (Ambiances, Atmospheres and Sensory Experiences of Spaces). Oxon, UK: Routledge, 2018. Sarah Pink et al. "Mundane data: The routines, contingencies and accomplishments of digital living," *Big Data & Society*, 2017:1-12. Sarah Pink, Self-tracking and Mobile Media: New Digital Materialities," *Mobile Media & Communication*, 5(3), 2017:219-238. Lupton, D., Pink, S., Lanbond, S. H. & Sumartojo, S. "Digital Traces in Context: Personal Data Contexts, Data Sense, and Self-Tracking Cycling," *International Journal of Communication* 12, 2018: 647-665 その他、S. Pink のモナッシュユ大学の URL および彼女との個人通信にあった文献などを参照した。なお、この研究ノートの執筆に関して、D・ハウズ教授、Milieux Institute for Arts, Culture and Technology at Concordia University のプロジェクト全般について数々の研究室をめぐって紹介していただいた同研究所 Harry Somak 博士、シンポジウム出席もふくめ面談していただいた同所長の Bart Simon 博士、また、筆者の研究全般について助言と数々のヒントをいただいた Division of Social and Transcultural Psychiatry, McGill University の所長 Laurence J. Kirmayer 教授に、深く感謝したい。また、筆者の海外出張を可能にいただいた東京通信大学の前川徹情報マネジメント学部教授と本学評議委員会メンバーの方々に対して深く感謝したい。この研究ノートは、出張期間中の活動報告のかたちで成果の一部としてまとめさせていただいた。

宮坂 敬造 (みやさか けいぞう) 東京通信大学 情報マネジメント学部 教授

